

真言密教からみた利他的行動研究の現状と課題

芝浦工業大学大学院 学生会員 ○岩上 大真
芝浦工業大学 正会員 岩倉 成志

1. はじめに

ベーシックな消費者行動理論は自己の利益最大化が理論的基礎となっている。しかし、我々は普段の生活において自己の利益だけではなく、協力、支援、思いやりといった他者にとって利益となるような利他的な部分も持って行動している。この人間の利他性については、今から約200年前にフランスの社会学者 August Comte が「利他主義」を提唱して以来、経済学のみならず心理学、社会学、進化生物学などの様々な学問分野で研究が進められてきた。もともと利他という言葉は仏教用語であり、その起源は学問的研究が始まる遥か以前の仏教の始祖である釈迦が生まれた紀元前5世紀頃まで遡る。利他として長い歴史の中で、学術研究における利他性は仏教界の利他を反映しているのであろうか。いにしへの利他性を再考することで、あるべき社会の姿が見えてくるのではないかと筆者は考える。

そこで本研究では、日本で本格的に仏教が普及し始めた約1200年前の平安時代、弘法大師空海によって説かれた真言密教の利他という立場から、学問的利他性に関する研究の現状と課題について考察することを目的とする。

2. 真言密教の利他性

2. 1. 即身成仏と三密行

真言密教とは即身成仏、三密行の教えをもとに弘法大師空海が開いた真言宗の思想のことである。

即身成仏とはこの身このままで生きてそのまま成仏するという意味で、成仏するには途方もない時間を要するという従前の仏教の考え方ではない新たな考え方であることが大きな特徴である。

また、三密行とは即身成仏するための具体的な行を指しており、口でお経を唱え、手で合掌をし、心で仏を感じるといった3つの行為を同時に行うことを指す。こうしたいかなる人でも三密行を行えば即身成仏できるという教えが真言密教の根本的な思想である。

2. 2. 真言密教の利他性

では、真言密教からみた利他的行動とはどういったものであるのか。これを考えるにあたっては、真言密教の中心となる仏である大日如来と、我々との一即多・多即一の関係性を理解しなければならない。

そもそも大日如来とは真理そのものを指し、即ち大宇宙に遍満する無限のエネルギーのことである。姿・形としては現れていない大日如来に我々は三密行を行い即身成仏する。つまり、我々一人一人は即ち大宇宙の無限のエネルギーの一つであり、同時に大宇宙の無限のエネルギーの一つが我々一人一人となる。

そして、自分と他者は全く違う存在ではなく、元々一つの集合体（大日如来）であり、よって他者のために行動することは、同一の存在である自分への行動となり、あらゆる他者に対して行う利他行動が必然のこととなる。この考えを宇宙の森羅万象との関係性まで拡張したのが真言密教の利他である。

現代の利他行動の例としては、全く自分とは関係のない他者に対して行動する震災時のボランティア活動とか電車に乗る際に席を譲る等が挙げられる。この自分の幸せは他人の幸せ、他人の幸せは自分の幸せといった行動規範が自分で行っている利他的行動が自利（利己的行動）として内包されている考えに基づいているのが真言密教からみた利他的行動である。

2. 3. 本研究における利他性の定義

図-1 左は真言密教の利他性をイメージしたものである。四角形の外枠で表現しているのが個人*i*の効用 V_i であり、枠内の大小様々な五角形が他者の効用 u_j である。このようにして個々として見ると単なる他者の効用であるが、全体として見ると個人の効用となる。つまり、自己を忘れて他者を利する結果自分の利得となっているのが真言密教の利他性である。本研究ではこの利他性を自分で行っている利他的行動が自利（利己的行動）として内包されているとする真言密教の利

キーワード：真言密教，即身成仏，利他性，効用関数

連絡先：〒135-8548 東京都江東区豊洲 3-7-5 09C32 芝浦工業大学 交通計画研究室 TEL：03-5859-8354

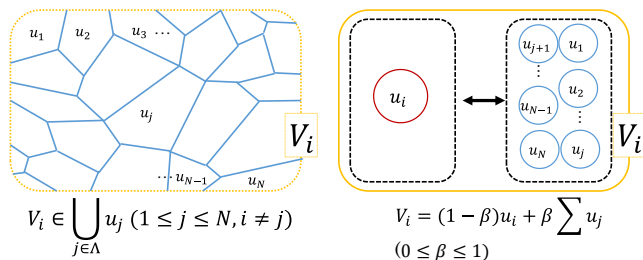


図-1 他者の効用 u_j と自己の効用 u_i の関係
(左：真言密教の利他 右：学問的利他)

他性と定義する。以下では現在研究されている利他的行動を整理し、真言密教と学問的利他との相違を考察し、研究課題を検討する。

3. 利他的行動研究の学問展開

August Comte が「利他主義」と定義して以降、心理学では Eisenberg, 進化生物学では Darwin, 社会学では Sorokin を初めとして様々な分野で研究が広まった。

小田ら (2013) によると利他的行動研究は心理学では「動機付けや発達の観点」から実験実証研究を中心に進められてきたのに対し、進化生物学では「相手が得た利益の程度、あるいは行為者が払った損失の程度」に焦点を当てた理論研究を中心に進められ、社会学は実験実証研究、経済学は理論研究を中心に研究されてきた。そしてこれらの学問を基に、社会心理学や進化心理学といった分野でも利他的行動研究が行われ現在に至っている。

そして信頼、社会規範、社会的相互作用といった利他性と関連する研究や、武士道のような日本文化の利他性に関する研究にも着目して調査を行う中で、山岸ら (1995) の日本人とアメリカ人との比較調査において「日本人の方が特定の相手との関係を維持することで利益を得られると考える傾向が強い。」といった知見から、自分にとって馴染みの深い集団において利他行動は創発しやすいことを示唆している。この点に関しては、小田ら (2013) が対象別利他行動尺度として家族や友人、他人によって利他行動尺度が異なるという研究を行っている。

4. 真言密教から見た学問的利他性の課題

佐々木 (2011) によれば、学問的な意味の利他は大乗仏教における「自己犠牲を伴う利他」として発展してきたとされている。この利他性を考慮した効用関数の一般形が図-1 右であり、 β は利他性の程度を表現している。本研究で調査した文献も、利他性の定義の

仕方は異なっていたが広義的に見て自己犠牲を伴う利他という点で同一であった。

そして、荒木 (2012), 梶原ら (2014), 山田 (1980) によれば「人間は元々利己的であり、その上で生じる問題を解決するために利他性が発生する」として、真言密教の利他性である利他的行動が自利として内包されているとする考えとは反対の考え方が進化生物学の研究の発展により現代において一般的となっている。本研究においてもほとんどの文献が利己的な人間による利他の創発とする考え方であった。

しかし唯一、奥井 (2009) は利他的行動の基本類型において、行動それ自体が自らの目的の一部になり得る「自己目的型行動」を示しており行動と目的の関係は内在的なものとして扱われるため、考え方の枠組として自分で行っている利他的行動が自利(利己的行動)として内包されているとする真言密教の利他性と類似していると言える。

以上から、学問的利他性の現状は、仏教の「自己犠牲を伴う利他」であり、真言密教の利他性の基本である他者と自己を同一とみなす考え方は極めて少ない。

5. おわりに

現状では真言密教の利他性を踏まえた効用関数は見られなかったため、今後の新たな利他性モデルの展望を述べたい。現在の一般的な利他的効用関数は自己と他者の効用に配分係数をかけて表現されているが、これは他者の効用を完全情報として認知していることが前提となっている。しかし、現実には他者自身が自己の効用を完全に知り得ていない。さらに利他的行動の自己への価値を理解していないことが考えられる。

このため、新たに取り入れる概念が、他者に対する利他的行動の説諭によって他者自身が潜在的な効用に気づくといった概念である。この気づきの変数を構造化した効用関数を検討する。自己と他者との相互作用(自己から他者への働きかけ)による気づきの発現により、個人間の異質な効用関数が同質性を高めていく、いわゆる社会的厚生関数に接近する。さらに社会全体の効用が上昇する可能性が高い。

このように、他者と同一と考えることにより他人を思いやる行動をとることができれば、例えば自国優先の経済政策で引き起こされる地球温暖化問題の解決への糸口になる可能性があるのではないかと、今後こうした規範的な社会のあり方を念頭に研究を進める。